

令和元年6月18日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02721

研究課題名(和文) 北陸地方の方言景觀に関する社会言語学的研究 方言景觀の多様性とその要因解明

研究課題名(英文) Sociolinguistic research on dialect landscape in Hokuriku district-Diversity of dialect landscape and elucidation of the factors-

研究代表者

加藤 和夫 (KATO, KAZUO)

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：60137015

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は北陸三県の県庁所在地である金沢市、富山市、福井市を中心とした各県での方言景觀を臨地調査によって収集し、収集した約300例の方言景觀を県別に、その活用方法によって分類し、そこで用いられている方言形式を示した報告書『北陸地方の方言景觀《資料集》』(101ページ、2019年3月)を作成した。約300例の半分以上を石川県、中でも金沢市での方言景觀が全体の3分の1を占めた。そして、それらの方言景觀使用の背景にある諸要因について、北陸新幹線開業の影響や意識調査の結果を参考に考察した。成果の一部は、日本方言研究会第104回研究発表会と第3回実践方言研究会で口頭発表するとともに、論文1編を執筆した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

生活語としての方言使用が衰退に向かう一方で、1980年代頃から方言の再評価が進み、生活語以外で様々な方言活用の事例が見られるようになった。西部方言地域の中では方言コンプレックスの強さが指摘され、従来から生活語以外の方言活用にも消極的だった北陸地方でも、ここ20年余りの間に徐々に活用事例が増えつつある。本研究では、従来明らかにされていなかった北陸地方での方言景觀(方言看板、方言キャッチコピー、方言グッズ等)に焦点をあてて、その使用実態を明らかにし、量的側面と内容的側面から県ごとの特徴を明らかにし、その背景にある諸要因と合わせて北陸地方の方言をめぐる社会状況の一端を捉えた点に意義がある。

研究成果の概要(英文)：This research collects dialect landscapes in Kanazawa, Toyama, and Fukui cities, which are the prefectural capitals of the Hokuriku 3 prefectures, by field surveys, and classified by method makes use of the approximately 300 dialect landscapes collected by prefecture, and which showed dialect form used there, made report "dialect scenery of Hokuriku district 《material collection》" (101 pages, March, 2019). Ishikawa Prefecture, more than half of the approximately 300 cases, among which the dialect landscape in Kanazawa city occupied a third of the whole. And the factors behind the use of these dialect landscapes were considered with reference to the influence of the opening of the Hokuriku Shinkansen and the results of the awareness survey. Some of the results were presented orally at the 104th the Dialectological Circle of Japan and the 3rd Practical Dialect Study Group, and I wrote a paper.

研究分野：日本語学、方言学、社会言語学

キーワード：方言景觀 言語景觀 北陸地方 方言の活用 方言意識

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 生活語としての方言の衰退が全国的に進行する一方で、生活語以外の部分での方言活用が全国的に増加しつつあることが先行研究で明らかにされつつある。西部方言地域の中では方言衰退が比較的速く、生活語以外での方言活用にも消極的だったと思われる北陸地方でも、方言活用事例が増加しつつある。しかし、これまで北陸地方における生活語以外での方言活用についてはほとんど先行研究がなく、実態が明らかになっていない。また、その北陸三県の比較やその違いの背景にある要因についての先行研究もほとんどない。

## 2. 研究の目的

(1) 上記の背景のもと、生活語以外での方言活用の中でも、特に方言景観（方言看板、方言キャッチコピー、方言ネーミング、方言グッズ類）に焦点を当て、北陸三県における事例を臨地調査によって収集し、それらについて、量的側面と、どのような景観場面でどのような方言形が利用されているかという内容的側面の両面から明らかにする。

(2) 方言景観の背景にある諸要因について、それらの方言景観の使用者（作成者）とその意図、それらを見る受容者の意識、当該地方の人々の方言意識の変容などを調査し、社会言語学的観点から解明する。

## 3. 研究の方法

### (1) 北陸地方における方言景観の実態調査

全国各地での方言活用の事例は、Sanseido Word-Wise Web で連載された「地域語の経済と社会—方言みやげ・グッズとその周辺—」と、その一部を単行本化した井上・大橋ほか（2013）などで紹介されているが、北陸三県での方言景観の報告事例は少なく、従来から研究代表者が収集してきた方言景観データも含めて、北陸三県の県庁所在地を中心に、石川県では能登地方の輪島・珠洲・七尾市、富山県では魚津・高岡・氷見市、福井県では小浜・敦賀・越前・勝山・大野市において方言景観収集のための臨地調査を行う。

### (2) 北陸地方における方言意識の変容に関する調査

言語編集部（1995）、佐藤・米田編著（1999）における全国14地点言語意識調査で、研究代表者が担当した金沢市と研究代表者の指導学生による1990年代後半の北陸三県の県庁所在地を含む9地点での言語意識調査から約20年を経過して、北陸方言話者の方言意識にどのような変化が見られるかを、三県の県庁所在地での活躍層（25歳～40歳）へのアンケート調査によって明らかにする。

### (3) 北陸地方における方言景観の活用者の意図と受容者意識に関する考察

(1)の方言景観の実態調査、(2)の言語（方言）意識調査に加えて、金沢市において方言活用者と受容者にインタビュー調査を行い、活用者の意図の一端と受容者意識を知り、とりわけ2015年3月の北陸新幹線開業前後の方言景観の増加現象との関連について考察する。

## 4. 研究成果

### (1) 北陸三県における方言景観の実態

研究代表者が本研究期間を中心に臨地調査によって北陸三県で収集できた方言景観（方言看板、方言キャッチコピー、方言ネーミング、方言グッズ類）は、研究成果報告書『北陸地方の方言景観《資料集》』に収めた約300例となった。それらの方言景観を「方言看板、方言キャッチコピー類」と「方言ネーミング、方言グッズ類」に分けて県ごとの数を示すと表のように

なる。

表 北陸三県の県別方言景観数 (%)

	石川県	富山県	福井県	計
方言看板、方言キャッチコピー	109(64%)	32(19%)	28(17%)	169
方言ネーミング、方言グッズ	90(60%)	26(17%)	34(23%)	150
計	199(62%)	58(18%)	62(20%)	319

表からは、富山県・福井県の方言景観数に比べて石川県が圧倒的に多いことがわかる（300例余りの3分の2近くを占める）。研究代表者が石川県に在住していることで、富山・福井両県に比べて石川県の方言景観を目にする機会が多かったことも影響している可能性はあるが、それでも石川県の数の圧倒的な多さ、中でもその半数の100例ほどが金沢市内で見られたものであることは注目できる。

以下では、北陸三県の方言景観の例を「方言看板、方言キャッチコピー類」と「方言ネーミング、方言グッズ類」に分けて、県庁所在地である金沢市、富山市、福井市の例から1例ずつ、写真中に見られる方言形とその共通語訳とともに挙げる。

#### ① 金沢市の方言景観写真

[方言看板・方言キャッチコピー類]



※「食べて行きま  
っし (食べて行き  
なさい)」

図1 近江町市場内の某飲食店の看板

[方言ネーミング・方言グッズ類]



図2 東茶屋街の蕎麦店ネーミング

※「ほやさけ (だから)」

#### ② 富山市の方言景観写真

[方言看板・方言キャッチコピー類]



※「きときと  
富山へ (新鮮  
な富山へ)」

図3 JR富山駅構内土産店入り口垂れ幕



図4 とやまコミュニティバス ネーミング

※「まいどはや (こんにちは)」

### ③ 福井市の方言景観写真

[方言看板・方言キャッチコピー類]



※「福井にきたぞあ!! (福井にきたよ)」「いっぺん 食べてみねのお (一度食べてみなさいね)」

図5 JR福井駅西口商店街 居酒屋垂れ幕

[方言ネーミング・方言グッズ類]

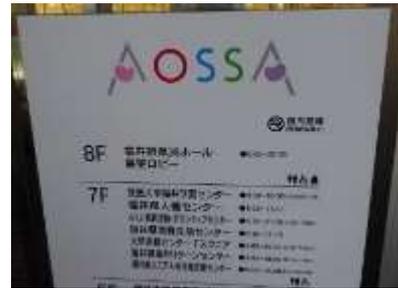


図6 JR福井駅東口公共ビル ネーミング

※「AOSSA アオッサ (会おうよ)」

なお、各県の方言景観で用いられている方言形に注目すると、各県の特徴がはっきり見えてくる。

最も景観数の多い石川県では「～まっし」(本来は尊敬の敬語助動詞「まっしやる・まさる」の命令形で、優しい命令、勧誘の「～なさい」「～ましよう」の意)の使用が最も多く、全199例のうち81例(41%)に使用されていた。それ以外でよく登場する方言形には、「あんやと(ありがとう)」、「がんこ(とても)」、「じわもん(地元のもの)」、「～や(～だ)」、「～さかい、～さけ(～から)」、「～げん(～のだ)」、「～じー(～ね)」などがある。中でも「～まっし」が圧倒的に多いのは、その意味から、観光客などに「～なさい」「～ましよう」と誘いかける意味を持つから、キャッチコピーとして使いやすい方言形であるからであろう。1990年代には金沢市内であり見られなかった方言景観が、2015年3月の北陸新幹線開業前後から、観光客の増加を意識した方言景観、とりわけ「～まっし」を用いた方言景観の増加が著しいことが明らかとなった。

富山県の方言景観で多く見られる方言形は、「新鮮」の意味の「きときと、キトキト」、石川県の「～まっし」にあたる「れる・られる」敬語の命令形に当たる「～れ、～られ」、勧誘の「～ましよう」にあたる「～んまいけ」である。特に「きときと」は、富山県が主に新鮮な魚介類のアピールに多用したため、石川県方言でも使われる方言形でありながら、今や富山県方言の代表となり、2012年には富山空港開港50周年を記念したネーミング「富山きときと空港」にまで用いられることとなった。

福井県の方言景観は、近畿方言に近い特徴を持つ嶺南地方ではあまり見られず、ほとんどが嶺北地方に集中する。福井県で比較的多く用いられる方言は、優しい命令の文末詞「～ねえ、～ねの(～なさい)」、勧誘の文末詞「～っさ(～ようよ)」、文末のモダリティ表現(話し手の認識を相手にも納得させる)「～ざあ(～よ)」などである。

以上、北陸三県における方言景観の実態について調査結果の概要を述べた。事前に予想はされたものの、北陸三県の方言景観には、相手にある行為を優しく促す「～まっし」(石川)、「～れ、～られ」(富山)、「～ねえ、～ねの」(福井)が多用されることが明らかとなり、その形式の違いが各県を特徴付けていることが確認できた。今後はさらに、方言景観に見られる他の方言形の特徴についての考察結果も発表予定である。

### (2) 北陸三県の県庁所在地における方言意識の変容

研究代表者及び指導学生が20年余り前の1994年から1997年にかけて北陸三県の計9地点で実施したネイティブ三世代(高校生、活躍層、高年層各50名)の言語意識調査の結果との比較のために、ほぼ同様の項目について、本研究期間に北陸三県の県庁所在地である金沢市、

富山市、福井市で、方言景観の作成に関係が深いと考えられる活躍層（25～40歳）50名を対象に方言意識調査を実施した。

調査結果のうち、方言景観との関連が予測できる項目の結果から整理・分析を進めているが、例えば、加藤（2003）で取り上げた方言の好感度についての質問（自分の方言が「好き」「嫌い」「どちらとも言えない」のいずれか）については、20年余り前は活躍層での「好き」の回答が金沢市で43%、富山市で30%、福井市で20%という結果であったが（「嫌い」の回答は金沢市で7%、富山市で16%、福井市で30%）、今回の調査結果では「好き」の回答が金沢市で65%、富山市で51%、福井市で43%と、いずれも20ポイント程度増加しており、北陸三県の県庁所在地では方言への好感度が高くなっていることが確認できた。

(1)で見た方言景観の実態が、こうした方言に対する意識と関わっていると思われ、そうした意識に、観光を中心とした外からの人の入り込み数の違いなども関わって、県庁所在地を中心とした北陸三県の方言景観の数の違いに影響していると考えた。

### (3) 北陸地方における方言景観とその方言活用者と受容者の意識の考察

この点については、研究期間中にインタビュー調査を実施できたのは、金沢市で方言景観が最も多く採集できた近江町市場付近の方言景観活用者にとどまったが、インタビューへの協力者の多くが、以前は方言看板、方言キャッチコピー等を積極的に利用しようという気持ちはなかったが、全国的に方言の見直しが進んでいることを知り、また21世紀に入った頃から観光客が増加し始め、特に2015年3月の北陸新幹線開業前後からは、観光客に対して石川の地方色を出す上で効果的な手段の一つと考えるようになったといった趣旨の発言をしていた。一方、近江町市場付近をはじめ、金沢市内で増加した方言景観について、生活場面での話し言葉としての方言とは異なって、看板等で文字を通じて表現することを不自然だ、わざとらしいと感じると批判的意見を述べる人もいたが、明らかに少数派であった。また、近江町市場のある武蔵が辻にある某デパートで、バーゲンセールなどのアピールに一時期店頭に大きく掲げられた方言キャッチコピーを作成した人にインタビューできたが、この方言景観については、観光客を意識したものではなく、地元の人に地元の方言の良さを見直して欲しいと思ってデパート側に提案して使用したと説明していた。今回、北陸三県で収集できた方言景観は圧倒的に観光客向けと考えられるものが多かったが、一方で、地元の人を意識した方言景観の存在の今後の動向にも注目したいと感じさせる回答の一つであった。

### <引用文献>

- ① 井上 史雄・大橋 敦夫ほか3名、魅せる方言 地域語の底力、三省堂、2013、223
- ② 加藤 和夫、北陸人の方言意識を探る—コンプレックスからの脱却をめざして—、北國文華、第15号、2003、pp.139-148
- ③ 佐藤 和之・米田 正人編著、どうなる日本のことば 方言と共通語のゆくえ、大修館書店、1999、274
- ④ 加藤 和夫、隠れた方言コンプレックス、変容する日本の方言、月刊言語 95.11 別冊、大修館書店、1995、pp.74-85
- ⑤ 言語編集部、変容する日本の方言 全国14地点、2800名の言語意識調査、月刊言語 95.11 別冊、大修館書店、1995、192

### 5. 主な発表論文等

[論文] (計1件)

- ① 加藤 和夫、生涯学習における地域への方言の発信、実践方言学講座 第2巻、査読無、くろしお出版、2019秋刊行予定、pp.1-22

〔学会発表〕（計2件）

- ① 加藤 和夫、マスメディア・生涯教育を中心とした地域への方言の発信、第3回実践方言研究会（岐阜大学）、2018
- ② 加藤 和夫、一般市民を対象としたマスメディアや生涯教育を通じた方言教育—石川県・福井県における実践事例から—、日本方言研究会第104回研究発表会（関西大学）、2017

〔報告書〕（計1件）

- ① 加藤 和夫、北陸地方の方言景観《資料集》、自家版、2019、101

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。